

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23226013	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	水都に関する歴史と環境の視点からの比較研究	研究代表者 (所属・職) (平成28年3月現在)	陣内 秀信 (法政大学・デザイン工学部・教授)

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○ A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

「水都」という視点から、世界の代表的な都市を精力的に調査し、その比較を目的とした本研究は、一定の成果があり進展は概ね順調である。しかし、多様な研究分担者を含む研究組織にもかかわらず、その有機的な連携は研究成果の発表状況からは読み取れない。しかも、研究代表者らが所属する国内の学会などでの査読付き論文が一編も無いことは、我が国の学術研究の発展に寄与する本事業の趣旨を反映しているとは思えない。研究分担者には基盤研究（S）の他の課題の研究代表者も含まれており、本来ならそれらとの相乗効果で期待以上の研究成果が得られる可能性があるが、現状ではその進展はないと判断される。

「水都学」の確立は、東日本大震災の復興、そして2020年開催の東京オリンピックにとっても重要な指針を示すものであり、今後、一層の努力が必要である。

【平成28年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった。
A-	本研究では、五大陸の全てをカバーして水都に関する精力的な現地調査が行われ、貴重な知見を得ている。また、全5巻の叢書「水都学」が刊行されており、本研究の成果が反映されている。これらを総合的に見て、研究目的である「A空間構造の歴史的特質を個別・典型的に把握・解明すること」については、研究成果報告書の記述は明確ではないものの一定の成果があったと言える。
	しかし、本研究の研究目的「B環境の変容を都市・建築工学的な側面と経済・産業における政策学の側面から考察すること」、及び「C両者をクロスさせることで、21世紀にふさわしい【歴史】と【環境】を基軸とする調査研究の方法論と研究の枠組みを新たに提示すること」に対応する成果については、具体的な形で示されていないことから、十分ではなかったと評価せざるを得ない。